

● 九州

池田和正

国や自治体の財政難、聴衆の高齢化は特に地方において深刻だ。各演奏団体やホールにとっては、単に難曲や大作に挑戦するだけでなく、社会とのかかわりも視野におさめた活動や、個性的なプログラムの提供がますます求められることになるだろう。

熊本地震1年を迎え、熊本県立劇場（熊本市）では復興への思いを寄せるコンサートが続いた。前震からちょうど1年となる4月14日夜には、山下一史の指揮により、マーラーの交響曲第2番「復活」が演奏された。学校や福祉施設への慰問コンサートを開催してきた地元の「くまもと音楽復興支援100人委員会」などの呼びかけで、国内プロ・オーケストラの楽員らが集ったもので、合唱を加えた280人が参加。当日は被災者300人も招待され、終演後、地震の起きた午後9時26分には聴衆とともに黙とうをささげた。メンバーの中核となったのが九州交響楽団で、7月に発生した九州北部豪雨後にも、主催公演の会場で募金活動を行うなど、「あなたの街のオーケストラ」として、地域、社会のために貢献します」とする活動理念を実践した。

熊本県芸術文化祭オープニングステージ（8月27日）では、山田和樹の指揮による横浜シンフォニーエッタと地元アマチュア・オーケストラとの共演で「千人の交響曲」第1部などが演奏された。同じ日には熊本城二の丸広場でも、ジャパン・オペラ・フェスティバル2017（主催・さわかみオペラ芸術振興財団）の一環として、ボローニャ歌劇団による、「椿姫」の野外無料公演が開催された。

このほか熊本シティオペラ協会は延期されていた「椿姫」（1月9日）を地元の中学・高校生らを招待して上演したほか、年末には阿蘇を舞台に自然と人間との関係を主題にした新作オペラ「笛姫」（12月10日）も初演した。テアトロ・リリカ熊本は「蝶々夫人」（11月23日）を上演した。

地方からの発信という点では、前年に始まった響ホール室内合奏団（北九州市）と東京藝術大とのコラボレーションが興味深い。合奏団のミュージック・アドバイザーを務める澤和樹（ヴァイオリン）が学長に就任した縁で実現したもので、11月19日の定期演奏会で、澤のソロによるヴィヴァルディ「四季」の演奏に合わせて、国際的に活躍する4人の映像作家が作品に想を得て制作したアニメーションが初公開された。クラシック音楽以上に一般になじみのない映像アートに光をあてる試みでもあり、それが東京に先立ち地方で初演された点でも特筆すべき企画といえる。

九州交響楽団は2013年より音楽監督に就任した小泉和裕のもとで、オーディションによる新規楽員の採用が進み、演奏技量の向上は目覚ましい。それは小泉の指揮による「カルミナ・ブラーナ」（10月15日）、「春の祭典」（12月7日）で存分に発揮された。定期演奏会には、指揮のセバスティアン・ヴァイグレ、ガエタノ・デスピノーサ、ピアノのオピッツらが客演。ただプログラムを概観すると、中国の李心草のタクトによる徐振民「楓橋夜泊」（11月10日）など一部を除けば、知名度のある大曲・難曲どまり、という印象だった。主催公演に集客が求められる事情があるとはいえ、2021年3月末までの任期の延長が決まった小泉のもと、さらに意欲的な挑戦が望まれる。

OMURA室内合奏団（長崎県大村市）は定期演奏会のほか、

1月から月に一度の「まちかどコンサート」をスタートさせた。公民館やギャラリーで室内楽の無料コンサートを催すことで、市民により楽団を身近に感じてもらうという試みだ。

日本フィルハーモニー交響楽団（東京）は第42回九州公演を、広上淳一の指揮で、九州各県の10都市で行った（2月10日～22日）。7月と10月には熊本地震被災地の学校や公民館で楽員による弦楽四重奏コンサートを催し、在京オーケでありながら唯一の九州ツアーを続ける楽団としての存在感を示した。

各地の音楽祭では、第22回宮崎国際音楽祭（4月28日～5月14日）が質量ともに高い完成度を示した。国内を代表する日本人演奏家で編成されるオーケストラ公演は、ピンスカス・ズーカーマン（ヴァイオリン）の指揮と独奏によるベートーヴェン、広上淳一の指揮、中村恵理（ソプラノ）、福井敬（テノール）らの出演による「椿姫」（演奏会形式）など多彩なプログラム。ベートーヴェン・プログラムは熊本県立劇場でも熊本地震復興支援のための無料のチャリティー公演として催された。ほかにも野平一郎（ピアノ）の企画によるアジアの現代音楽、ライナー・キュッヒル（ヴァイオリン）とミッシェル・マイスキー（チェロ）らが出演する室内楽など意欲的なプログラムが並んだ。

第19回別府アルゲリッチ音楽祭（5月6日～26日）では、小澤征爾が館長を務める水戸芸術館との連携で、マルタ・アルゲリッチ（ピアノ）と小澤が指揮する水戸室内管弦楽団の共演が実現した。5時間にわたるマラソン・コンサートには94歳のイヴリー・ギトリス（ヴァイオリン）が出演、アルゲリッチの3人の娘が演奏や朗読等で参加した。別府市の「しいきアルゲリッチハウス」では通年で室内楽シリーズやマスタークラスが始まったが、集客などの課題を抱えている。

第38回霧島国際音楽祭（7月19日～8月6日）では、音楽監督の堤剛（チェロ）やアンドレア・ロスト（ソプラノ）、エリソ・ヴィルサラーゼ（ピアノ）、ダン・タイ・ソン（同）らのプロデュース公演やマスタークラスが例年通りに催されたが、昨年までオーケストラ公演や講習会などを通じて、音楽祭の顔というべき存在だった地元鹿児島出身の下野竜也が、広島交響楽団の音楽監督就任に伴い出演できなくなったのが惜まれる。

前年7年ぶりに復活した、大分県・ゆふいん音楽祭（7月29～30日）では、河野文昭（チェロ）らによる室内楽コンサートが行われた。北九州国際音楽祭（10月7日～11月26日）は第30回を迎えた。響ホールを主会場に、買い取り公演と自主企画を組み合わせた形は、それなりに地元に着定しており、最終日には自主企画として、地元出身の篠崎史紀が率いる特別編成のオーケストラによるガラ・コンサートが催された。

公共ホールでは、iichiko総合文化センター（大分市）が東京二期会とのオペラの共同制作を重ねており、勅使河原三郎演出の「魔笛」（3月11日）、リチャード・ジョーンズ演出の「ばらの騎士」（11月5日）が上演された。嘉目真木子（ソプラノ）から地元出身の歌手も起用しており、地方における本格的なオペラ上演の一つのありかたを示している。

アルカスSASEBO（長崎県佐世保市）では、豊嶋泰嗣（ヴァイオリン）を音楽監督に、国内外で活躍するソリストで特別編成されるチェンパー・ソロイスト・佐世保が初公演を行った（3月5日）。

この種の試みは、すでにアクロス福岡（福岡市）のアクロス弦楽合奏団が先行しており、こちらは11回目の定期演奏会を迎えた（8月20日）。九州の基幹ホールとして、ザンデルリンク指揮ハンブルク響、フィリップ・ジョルダン指揮ウィーン響、ハンガリー国立歌劇場などを招聘したほか、新・福岡古楽音楽祭2017（10月20～22日）では、ラ・プティット・バンドを招いてハイドンのオペラ「ラ・カンテリーナ」を上演した。